

—2015年 私たち8人の夏がはじまった—

— 8月16日の午後—

私は20日間留守にしていた上海の部屋に帰ってきた。

鏡には、日焼けして真っ黒になった自分の姿が写っていた。

手足は蚊に噛まれた跡が今でも残っている。でも、決まっていた。鏡に映る、以前よりも一周り成長した自分を、わたしは誇りに思った。

「支教」とは—大学生が貧困地区の小中学校に短期間滞在し、学校に寝泊まりしながら子供たちに教育を提供するボランティア活動のことである。

かかる費用は派遣先の学校場所によって様々だが、私の場合、交通費と学校での食事や宿泊費を含めて、参加費は2000元弱だった。

私達にとって、過酷な環境で過ごす上、費用も学生にとって決して安いとは言えない。

しかし、この支教には、毎年たくさんの応募があり、書類審査と面接、訓練を経て選ばれた学生が10人ほどずつ、中国各地の貧困地区の学校に赴く。

私が参加しようと思ったのは、「変形計」というテレビ番組がきっかけである。2,012年、当時大連に留学していた私は、初めてこのテレビ番組を見た。

変形計とは、都市に住む子供と、貧困地区に住む子供を1日間交換するというドキュメント番組である。

お互い見知らぬ土地で生活し、その土地に住む人々と出会い、成長していく子供の姿を描いたドキュメント番組は、湖南テレビ局で毎週土曜日に放送されている。

農村の純粋な子供達が大都市のマンモス校に通い、様々な人たちに支えられながら頑張る姿は、知らぬ間に大都市の人たちを感動させた。

大都市のごともは田舎の暮らしに悪戦苦闘しつつも、だんだんと馴染み、1日後には涙を流しながら村を去る。ここでは長く書けないが、わたしは毎回涙を流しながら見ていた。

その変形計から学び取ることで中国の農村の現状は、私の想像を遥かに超えたものであった。

日本にも農村はあるが、全ての子供たちは義務教育を受けることができ、毎日の食事を食べることができる。しかし、中国貧困地区の子供たちは、朝まだ夜が明けないうちに家を出て、薪を拾いながら長時間の道のりを歩き、やっと学校へ着く。

不十分な環境の学校で大好きな勉強をして、昼は芋や野菜の給食を食べる。一日のうち、その1食しか食べることのできない子供たちがほとんどである。

また、子供たちの両親は農村から離れた街に出稼ぎに出て子供たちの学費や生活費を稼いでいる。そのため、両親に会うことができないのは一年に2回だけという子供がほとんどである。

そんな現状を知り、私は、「中国へ留学したら、せったい支教に参加する。」と決意した。以下は、私の応募用紙の一部である。

「私は、中国人ではない。だから、国語を教えることも、大学受験に合格するための勉強も教えることはできない。

また、たった2週間の支教で、子供たちに十分な教育を提供することもできない。」

でも、たったひとつ、私が子供たちに伝えたいことは、『ひとりの外国人が、あなたたちのことに関心を持ち、少しでも力になりたいと思っっていること』。

農村に住む子供たちのほとんどは、両親が出稼ぎに行き、おじいさんやおばあさんと生活している。母を失った私は、子供たちの切なさが痛いほどに分かる。

私は子供たちに、私の伝えることのできる「愛」を精一杯に伝えたい。

そして愛や音楽、文化は国境をも超えることができること、努力をすれば夢は必ず叶うのだということ伝えたい。」

私は自らの支教に対する考えと情熱を、応募用紙いっぱい書いた。「あなたの応募用紙を見て感動しました。ぜひ面接に来てください。」

復旦大学の2つの支教ボランティア団体から面接の知らせが届いた。

面接に合格し、2週間に一回の勉強会と体力テスト、様々な訓練を経て、

2015年7月27日出発の日を迎えた。

上海南駅—桂林駅 列車に揺られて

7月27日、登山リュックと二日分の食料と水を入れた手荷物バックを持って、私は上海南駅に到着した。駅までは、先輩のみずきさんと博士課程の公為明先輩が送ってくださった。これから始まる支教の旅に、どきどきワクワクしながら、ほかのメンバーの到着を待った。

最初に着いていたのは第二軍医学部の郭継尧である。わたしは彼と一緒に切符を取りに行った。午後4時半の発車時間を前に、仲間たちが次々と駅に到着した。

ここで、2週間の支教を共にした女子5名、男子3名合計8人の仲間たちを紹介したいと思う。

リーダー 劉昭 復旦大学医学部5年制(6月から4年生)

副リーダー 吉永英末 復旦大学歴史学部修士3年制(6月から修士2年生)

経理 郭継尧 第二軍医学部8年制(6月から3年生)

カメラ 丁佳琳 復旦大学学生物化学学部 (6月から2年生)

部員 阿晔岭 復旦大学8年制臨床医学部(6月から2年生)



部員 朱容惠 復旦大学医学部の年制(6月から3年生)  
部員 朱奇苗 上海N.Y.大学 国際貿易学部(6月于エロに留学)  
部員 Donnie(US) 復旦大学国際関係学部修士(6月から修士2年生)

ご覧いただけたように、私たちグループの最大の特徴は8人の部員のうち、4人の部員が医学部ということである。

このことを活かして、私たちはのちに、農村で医療活動も行うことになる。

私たちを乗せた列車は、予定通り午後4時10分にゆっくりと動き出した。

上海から桂林までは、約2.5時間である。私たちは、列車の中でお互いについて語り合った。

リーダーであり、医学部の中で一番年上の劉昭は、先輩たちに授業や実験の際の様々なアドバイスを行った。医者のお三人はとても熱心に聞いていた。わたしは、上海N.Y.大学の奇苗と、彼女の行ったことのある国、わたしの行ったことのある国について語り合った。

イスラエルやエジプトにもいったことのある彼女の経験は、私にとっても新鮮だった。

彼女は、自分の大学である上海ニューヨーク大学の特色に似合ったように、これから大きく羽ばたこうとしていた。

また、これから行う日程や教案についても、全員で打ち合わせをした。

のちに一番仲良くなる第二軍医大学の郭継者は、心配そうに私にこう言った。

「僕が教えるのは中国の軍隊の歴史について、えみが教えるのは平和学。僕たちもしかして矛盾しているのかな？」一瞬気まずい空気が流れたが、その空気も「私達はみんな平和を願ってる。」

二人の夢も、自らの願う平和のためだもんね。」というリーダーの言葉がかき消された。

ありとあらゆる揺られる乗り物に乗るとすぐに寝てしまっるのが私の癖である。

消灯前に列車の3段ベットの真ん中に横になった私が、次に目を開けた頃、空はすでに明るくなっていた。

## 桂林駅で 外人とついで

私たちはお昼前に桂林駅に着いた。朝目覚めると緑いっぱいの、上海とは全く異なる景色に、メンバー全員が「わー！」と声を上げた。

喜びもつかの間、私たちは駅を出るとたくさん「黒車」の運転手たちに囲まれてしまった。

中国各地の駅の前には「黒車」と呼ばれる正式ではないタクシートの運転手が、待ち伏せしている。その土地に慣れない旅行者に「どこへ行くんだ？乗せていくよー」と言ってくる。

大きなスーツケースと登山リュックを背負った私たちは彼らにとって絶好の顧客である。



私たちは彼ら黒車のおじさんたちの合間を逃げるように、抜け出した。

そして自分たちで公共機関を利用して学校へ向かおうとした。

しかし、おじさんたちはしつこいほどついてくる。私たちは、ボランティア先の校長先生に教えてもらった住所をもとに歩き出したが、おじさんたちは私たちを取り囲んで

「そっちに駅はないよ。」

「おれの車に乗ったら目的地まですぐ連れて行ってあげるよ。」とこっぴどい言いつけてくる。

わたしは最後までこの黒車に乗ることに反対していたが、おじさんたちに前を封じられ、炎天下のなか、見知らぬ土地で荷物を持ってバスを探すのも困難と判断したりダーの決断のもと私たちは仕方なくこの黒車にのり、汽車駅に行くことになった。

幸い、全員同じ大きなワゴンに乗り込むことができたのだが、私たちはまんまと、このおじさんに騙されてしまつことになる。

地図上では近い距離なのに、車はいつこうに目的地につかない。

それどころか目的地から外れているようにも思う。しかし、メンバー全員が天津や河北など桂林出身ではないため、「これが近道だよ」といっておじさんの言葉を疑つことはできない。

やっと着いた汽車駅で私たちはほっとして高額の1000円を支払った。

これで終われば、まだよかったのだが、私たちが汽車駅から次のバスに乗り込もうとしたとき、この黒車のおじさんはまた私たちのもとに走り寄り寄ってきた。

バスに乗り込もうとする私たちの前にはだかり、「お前たち、このバスには乗らせないぞ。絶対に逃げさせない！」私たちは思わず、おじさんの言葉を疑った。

「一体どうしよういんですか？」「二人の男子メンバーが尋ねると、片手にタバコとライターを持ったおじさんはこう言った。

「いまタバコを買いに行つたら、この1000円札が偽札だと言われて突き返された。一体どうしよういんだー？」

私たちはすくすく反論した。

「そんなはずはありません。私たちは上海から着いたばかりです。このお金が偽札であるはずがありません。」

しかし、激怒したこのおじさんはバスに乗ろうとする私たちをの前にはだかり、一歩も譲らない。

私たちは分かっていて、このおじさんの持っている1000円札こそが偽物で、おじさんはまた、私たちから1000円を騙し取るつもりです。

バスの出発を前にもめているため、バスはいつこうに動くことができない。バスの運転手さんは、「早く新しい1000円札と交換してバスに乗れ。」と急がせてくる。

メンバーの阿畔峠は仕方なく、新しい100元札を渡し、私たちはようやくバスに乗り込んだ。

「なんてひどいひどい。」

悔しい思いをした私たちは、次々と不満をこぼした。

中国には様々な騙し人がいるが、このような手法に出会ったのは私たちみな初めてである。

私が、「警察を呼べばよかったのに。」と言うと、リーダーの劉昭が分析を経てこう言った。

「あの場所全体は彼らの領域。騙してきたおじさんも、バスの運転手も、警察もみんな顔見知り。

そして私たちは外から来た右も左も分からない人たち。私たちはこの土地の方言もわからないし、彼らがグルになって騙してきたら、私たちはどうすることもできない。

彼らがこうやって騙してきた人たちも少なくないよ。」と教えてくれた。

ボランティアのために行ってきた見知らぬ土地で、着いてすぐ騙されてしまった私たちは、「これからは絶対に黒車に乗らないようにしよう。」と誓い合った。

バスとバスを乗る継ぎ、私たちは支教先の小学校を目指した。学校といっても、駅から何分という距離にあるわけでは決していない。

5時間凸凹道を上り、また乗り換えては3時間緑一色の道を進んだ。

ボランティア先の学校は、農村地区の中にある。山を越えて緑のトンネルをへくって、私たちは山の中へ中へと入っていった。

その緑だけの景色に、私たちは、「いままで私たちが想像していた農村というのは、本当の農村ではなかったね

これこそが、本当の農村だよ」と口を合わせて言い合った。

本当に、此処こそが想像を超えた「田舎のなかの田舎」だった。

学校までは、校長先生の友人の運転するワゴンで向かった。

下ろされたのは小学校へと続く急な坂道の下、私たちはスーツケースと、支教のために用意した子供たちへの文房具や授業で使う材料を両手いっぱい持って、最後の坂を登った。

やっと学校へ到着したとき、時計はすでに午後2時を回っていた。

校長先生と奥さんの歓迎を受けながら私たちは夕食をとった。

現地で食べる最初のごはんは、地元で採れた野菜と温かい白ご飯だった。

肉や魚は一切なかったが、小さなテーブルに8人で丸くなって食べるご飯は、上海で食べたどんな高いレストランで食べるご飯よりも美味しく感じた。



ケータイの電波もなく、インターネット環境もないこの山の中の学校で、これから、始まる2週間に様々な期待を乗せて、私たちは宿舍の硬いベットに横になった。

時計はまだ、10時にもなっていないかった。

## 『ちいさな村の物語』その2

7月28日、学校に来て2日目の朝、私たちはこの小さな村で挨拶回りをした。

学校通常9月から始まるため、現在子供たちは夏休み真っ盛りなのである。そこで私たちは私たち支教の先生が到着したことを知らせるために、4人ずつ2つのグループに別れ、この小さな村を回った。

最初に学校に駆けつけてくれた3人の男子を先頭に、村の人に出会うたびに、「私たちは上海復旦大学からきました。今年の支教の先生です。もううちにお子さんがいらっしやいましたら、ぜひ学校に来てくださいとお伝えくださいー」と言っておいた。

復旦大学からは毎年この学校に支教の学生(ここでは先生が来ている。そのため、「今年も良々来たね」と歓迎してくれた。

午後は上海から持ってきた3つの血圧計を持って全員で検診に出かけた。

この村では、医者が一人しかいない。また医療費もかかるため、ほとんどの高齢者の方々は定期的に病院に検診に行くことができない。

私たちは、医学部の4人の学生を先頭に、鼓樓と呼ばれる木で出来た人々の集まる場所に行き、おじいさんやおばあさんに声をかけた。

「私たちは復旦大学の医学部の学生です。最近お身体の調子はいかがですか？血圧を測りますね。」

私たちは、高齢者の方一人ひとりの血圧を測って周り、医学部の学生はそれぞれ健康に関するアドバイスをを行った。

お年寄りの方は方言しか話さないため、子供たちに通訳をしてもらった。この検診は健康診断だけでなく、村の人たちとの警戒を取る大切な交流となった。

3日目の朝、校長先生に学校から離れた小さなスーパーのある町に連れて行ってもらった。私たちは生活に必要なものを買った。

明日からいよいよ、授業開始である。たくさん学生たちが集まってくれようか不安を抱えたまま、私たちは授業1日目を待った。

### 授業1日目

授業は午前中3コマ、午後2コマの5コマである。昼間は暑いので、1時半から4時まで長い昼休みを取るの、この小学校の習慣に合わせた。

8時半になると、教室いっぱい子供たちが集まっていた。子供たちが来てくれるか心配していた私たちは思わずほっとした。私たち8人は自己紹介をする、自分が教える教科の特色などを説明した。わたし



は、音楽と道徳を受け持つことになっていた。

子供たちに、自己紹介したあと、午後からは本格的に授業が始まった。

わたしは、音楽の時間に森山直太朗の「さくら」を子供達と一緒に練習した。

子供たちにとって日本語に触れるのは初めてで、日本語で歌を歌えるものだろうか、と思われるだろうが、子供たちの耳は素晴らしく、歌いだすと全く、外国語で歌っているようには聞こえなかった。

わたしは以前に上海で子供たちに日本語を教えるボランティアをしたことがあったため、スムーズに授業を進めることができた。子供たちは、歌詞を覚えることは難しそうであったが、授業が終わっても、「さくら、さくら」と日本を代表する花の名前はみんな言えるようになっていた。私の2週間の支教生活は、さくらの歌とともに幕を閉じた。

### 支教生活

長い昼休みに、ほかのメンバーがお昼寝しているのをよそに、わたしは毎日子供たちと一緒に山登りに行った。

村を取り囲む山は緑一色で、登る過程で山の湧き水にも触れることができる。

子供たちはその水で喉を潤した。山の上からは、小学校や村全体を見下ろすことができた。

これまでに見たことのない、緑の美しい景色をみるために、わたしは毎回山に登った。



山登りでは、わたしが学生で、子供たちが先生である。「この実は食べられるよ」と言いつつ、野いちごやつくねくれたり、たくさん食べていたら、いつの間にか舌が紫になっていた。( )

「この葉っぱははるの薬になるから、500グラム100円で売れるよ。」と教えてくれたりと、山に関する知識は、子供たちの身体に身についていた。わたしは子供たちを先頭に、毎日山登りを楽しんだ。

午後の授業が終わると、みんなで近くの川に行つて泳いだ。最初は足をつけるだけだったが、子供たちがメートルほどの崖から飛び降りて川に入っていくのを見て、わたしも挑戦したくなり、2回目にして飛び込んでみた。

勇気を振り絞ってみると、本当に気持ちが良いものである。わたしは子供に戻って、こどもに戻り、無邪気に水遊びを楽しんだ。



夜のミーティングのあと、女子の宿舎に戻ると、おしゃべり会が始まる。女の子は本当に、おしゃべり好きである。この話の話題のほとんどが、恋愛についてであったため、彼氏のいないわたしはあまり付いていくことができなかった。でも、一週間も生活を共にしていると、私たちは学年や専攻を越え、お互い信頼できる仲間になっていた。

また、私たち女子の1人部屋には、每晚様々な虫が挨拶に来た。

たまにねずみも現れた。わたしはそれらのものに対してあまり恐怖心はないのだが、ねずみや特大蜘蛛を目にした部員の叫び声の方に驚いて起きることが何度もあった。

寝る前は女子全員でお手洗いを済ませ、ベッドの至るところに虫除けスプレーを振って、タオルケットで身体を覆うようにして寝た。

それでも、毎朝新たな場所が蚊に噛まれていた。

そんな支教も後半一週間にさしかかった頃、最初は何もかも新鮮であったこの学校での生活を、辛く感じるようになった。

わたしはとっても上海に帰りたくなった。この山の中では、インターネットもなければ携帯電話の電波もない。山の外にいる誰とも連絡が取れない。

かつて当たり前のように身近にあった様々なものが急に恋しくなった。

山の中の学校なので、停電や停水は日常茶飯事で、私たちはそれが同時に停まらなないことを祈っていた。一日三度の食事の他に、間食することはなかった。

というのも、食べる物が何もないためである。毎回の食事は、芋や青野菜などを中心に三種類の野菜と、おかわり自由の白ご飯である。

わたしは、男子学生がおとなしく一杯しか食べていないのをよそに、毎回二杯のごはんを食べていた。

ホームシックになり職員室で泣きべそをかきながらいつものように日記を書いていると、部員の郭継孝はわたしに、「この映画知ってるか」といって話しかけてきた。

それは、日本の映画で、都会から来た主人公の青年が田舎で植木の仕事をやる物語であった。

都会との生活のギャップに悪戦苦闘しながらも、最後まで諦めず仕事を続ける青年の姿に感動し、村人たちはだんだん都会から来た彼を仲間として認めるようになっていった。

そして主人公は村の伝統行事に参加することになる。

わたしは主人公と今の自分を重ねた。郭継孝と一緒に見たこの映画は、ホームシックになっていたわたしに、もうひと踏み張りする勇気を与えてくれた。次の日から、わたしは気持ちを入れ替えて支教に望んだ。

それからの一週間はあっという間に過ぎていったように思う。道徳の授業では、虫や小動物を平気で殺してしまう子供たちへの命の教育を行った。

「私たちにお父さんとお母さんがいるように、虫にもねずみにも家族が居るんだよ。」たくさんの動物の絵を書いてわたしは、すべての命の尊さを訴えた。

また、アメリカの大統領の命の重さも、私たちの命の重さも同じで、命はお金や権利の大ききで図ることができない、すべてが尊いのだということを一生涯にこどもたちに訴えた。





それから、子供たちと一緒に山に登るたびに、生き物を捕まえた子供たちは私に嬉しそうに見せてくる。「えみ先生、カエルとったよー」「わたしは一瞬そっとするが、「すいね。畑」に返してあげてね。」「と言うと、「うん。お父さんとお母さんの元に返してあげる」といって畑に逃がした。教育の成果を、目に見て感じ取る事ができた。

### 軍隊と平和学と 決して矛盾ではない

子供たちは、元気いっぱいでも騒がしいため、ひとりの先生が授業しているとき、だれかがサポートーとして入っていた。ある郭継孝の中国の軍隊の歴史の授業で、わたしがサポートーを勤めていたときのこと。郭継孝の話す歴史をわたしも熱心に聴いていたのだが、授業も残り30分になったころ、彼はいきなり私の目を見て話した。「みんなも知っているように、えみ先生は日本人だね。昔、中国と日本は戦争をした。日本を憎いと思うている人もいると思う。

でも、僕はえみ先生のことを心から尊敬しているし、これからも良き友達、仲間でありたいと思っている。

政府間の関係がどうであれ、僕たち民間交流の絆は固くて尊い。

切ることができないんだ。えみ先生が君たちに関心を持ってこの学校に来てくれたことをみんな感謝しようね。そして、残り時間はえみ先生に宛てて、手紙を書いて欲しい。」

わたしは、思わず口をあんぐり開けてしまった。

まさか彼が軍隊の歴史の授業で私を取り上げ、日本と中国の民間交流の平和を語るとは思ってもしなかった。

ましてや、最後に私宛に手紙を書いてもらうなんて、サポートーとしてたまたま教室に入った時には想像もしていなかった。

授業の最後、子供たち一人ひとりがわたしに手紙をくれた心のこもった手紙には、

「えみ先生を一度も外国人の先生として見たことはあま



ませんでした。わざわざ遠くから来てくれてありがとうございます。」

「過去の歴史がどうであれ、私たちはみんな平和を願う国民です。私たちの最初の日本人の先生になってくれてありがとうございます。」など、数々の手紙を受け取った。

子供たち一人ひとりにお礼を言うとともに、この授業を繰り広げた軍医大学の郭継孝の温かい言葉に胸が熱くなった。

### 音楽の授業のポイント

ある日の音楽の授業のこと。篠子兄弟の「父親」という歌の歌詞を黒板に書いていると、「その歌知ってる。」と言って、わたしが教える前に、子供たちは歌いだした。

「なんで知っているの?」と聞くと、歌詞がとても感動するからすぐに覚えたという。私も嬉しくなっていて、それならば座って歌うのではなくて、後ろの方に全員並んで歌ってみようと言った。私自身が、小中学校の音楽の授業でそう学んできたように。

ところが、後ろに並んでくださいと指示を出したところで、子供たちはいろいろ動いってしまう。普段木登りや逆立ちなど教室を走り回っていることもたちが、「後ろに立って並び」という動作をしようとしていない。

わたしが何度かお願いすると、子供たちの大半は後ろに並んで「早く歌おうよー」と言ってくれた。しかし、ふだん大人しく成績の優秀な学生数名が、いっこうに席を立とうとしない。

わたしは一人ひとりの歩み寄って、なぜ並んで歌おうとしないのかと尋ねた。すると、返ってきた答えは、「疲れたから」「並びたくない」とあった。

わたしは、先生として盛り上がっていた気持ちが一気に冷めていくのが分かった。

一言で言うところ、「ショック」であった。授業は止めることができないため、後ろに並んだ学生だけで引き続き歌を歌ったが、私の頭の中は「なぜ?」という疑問でいっぱいだった。

結局、私に一番なついていた女の子を含む10名弱の学生は、最後まで自分の席から動こうとしなかった。わたしは音楽の時間を早めに切り上げ、教室の子供たちに話をした。

「今日の出来事は、先生にとって、とても驚いたし、正直、大きなショックを受けました。これまで、この何日間、わたしは、自分が本当の先生なのだと思いついていました。でも、私はあなたたちの面倒を2週間しか見ることができない。無責任な先生と思われるのも仕方がない。

私に対して今日のような態度をとっても、構わない。でも、6月から新しい学期が始まったら、先生に対して、同じような態度をとらないで欲しい。

なぜなら、先生はとっても傷つくだろうから。「私は、思ったことを率直に子供たちに話した。教室は静かになり、私も静かに教室を出て行った。

誰とも話す気にはなれず、先生をしていた自分がバカバカしくなって、泣きたくなくなった。

職員室に戻ると、部長に今日あった出来事を話した。ひとりの、またひとりと慰めとアドバイスをくれた。「こういう時には美味しいものを食べて元気を出して。」と行って1元のアイスを買って来てくれた部長もいた。

ベットの横になっていると、子供たちがいつものように山登りに行くつと誘ってきた。私は、気持ちを切り替えるために、外に出た。

すると、座って一向に動かなかった学生のひとり、私に最もなついていた女の子も寄ってきた。「先生、めんなさい。わびじゃないなかったの」「そう言い、私たちと一緒に山に登りたいと言った。

私は、「大丈夫だよ。気にしなくて。」と、何事もなかったように学校を出発した。

山登りの間、彼女はずっと私の手を握っていた。内気な彼女は本当は山登りなどが好きではと以前話していた。なのに、今日は私たちと一緒に汗びっしょりになりながら、高く高く登った。それが彼女の精一杯の誠意だということを知り、私は心から理解した。

この経験は、これまで順調に授業を進めていた私に立ち止まるきっかけを与えてくれた。

わたしは深く反省した。

いきなりふりだしに引き戻されたような気持ちで、先生としての役割を改めて考えさせられた。この出来事に悲しみを隠せなかったのは事実である。だが、この経験が、私と彼女を、成長させたことは間違いないだろう。

### 別れと旅立ち

授業最終日、私はリーダーにもう一度授業をさせてもらえないかと頼んだ。最後に道徳の授業をしたかった。私は、ホイロットの出来事も含め、これまでの授業で伝えきれなかったことを子供たちに真っ直ぐに伝えたいかった。

10歳未満の子供たちには、少し難しかったかもしれない。でも、いつか大きくなってその言葉の意味が分かるようになったとき、思い出して欲しいと思った。

道徳のある人になること。人のために尽くすこと。すると知らぬ間に、自分が幸せになっていることに気づくようになった。

命を大切にすること。トンボもねずみも、命あつてこの世に生まれてきたということ。そして彼らにも家族がいるのだということ。ありがとう、ごめんなさいをきちんとということ。

黒板いっぱい書いた私から伝えられる子供たちへの最後のメッセージを、子供たちはノートに書き留めていた。

最終日の夜、たくさんの方が、「先生、私の家にご飯に食べに来てください」と誘ってくれた。私たちは、最後のごはんを8人それぞれが違う家で食べることにした。



子供達の住んでいる「家」は、木で作られている。

この「家」の様子は、言葉で表現しがたい。というのも、私たちは、この村の「家」をよく驚いてしまったからである。

木で作られたこの「家」は、一階が牛や豚などの動物で、薄い板を挟んで二階に人々が暮らしている。ベットのまなげれば、電気すらない。

料理をするときは懐中電灯を持って野菜を炒める。コンロもないので、集めてきた薪で火を起す。

電気がないので火がくれないうちにごはんを済ませるのである。原始時代にタイムスリップしたような感じがした。

上海からきた私たち部員は、なんの悪気もなく、ただ一言思わず口から出ってしまったのは、「これが家。。。」「であった。それほど、この農村の家は私たちの想像を遥かに超えたものであった。

わたしが招待された女の子の家では、彼女の両親もちょっと出稼ぎから帰ってきていて、精一杯のおもてなしを受けた。この村で過ごす最後の夜を、温かい家族に包まれて過ごした。

8月11日、早朝の出発だったにも関わらず、たくさんの子供たちが見送りに来てくれた。私たちは、涙をにじませながら、二週間過ごしたこの村を後にした。

2015年夏。湖南省怀化通道县上岩完小学で過ごした支教生活。8人の仲間の支えと、子供たちの笑顔に支えられて、わたしはここまで歩いてこれた。子供達の笑顔を、仲間たちの優しさを、わたしは一生忘れ

るじじいかならだるじじい。

みんなありがとう。